

石仏探訪のしおり

石造物

屋外に造立され、石材を加工した石造物は、私たちにとって比較的接しやすくて文化財です。石造物という表現が一般的ですが石造美術といつてもよ、石造文化財とも呼ばれます。主として仏教信仰に関わるものをい、近世の記念碑・顕彰碑などは石造美術とは呼びません。便宜的には石塔(墓碑)と石仏に二分されます。石材を加工するという点で華々しい変化とは無縁のように見えますが、そこにはおのずから時代の変化や好みが反映されています。石塔は根本的には供養塔としての意義を持ち、石仏はどちらかというと近世の民間信仰関係、いわゆる路傍の石仏といわれるものです。その他の石造物は神社・寺院の石燈籠、民間の石祀力石の類まで含んでいます。

近世の石仏

私たちの地域の石仏のほとんどは近世、即ち江戸時代以降のもので、多くの石仏から近世における農民を主体とした庶民の信仰が窺えます。江戸時代になると庶民の間に観音や地藏への信仰が大衆的な盛行をみせ、多種類の石仏が造立されました。寺の本堂で礼拝する対象というよりも、庶民の日常的な暮らしの中であり、生活を支えるものであり、また墓標としての石仏ともなりました。これらの石仏には様々な挿話や利益が付与され、素顔の庶民信仰を感じさせます。路傍にひっそりと佇んでいる石仏にも、これに願いをこめた多くの人々がいたのです。素朴な石仏を見ると、何となく心が安らぐものです。

庚申塔(こうしん様)

甲子(かっし)、己子(きし)・庚申(こうしん)の日は、60の干支の組み合わせの中で、特に「待ちこご」(日待)と関係の深い日です。江戸時代の一枚摺りの曆には、この三つの当たり日を別枠で示しているものもあります。日待信仰の代表的なものは庚申待で、一番身近にある石仏が庚申塔です。「人の体内にいる三尸(さんし)の虫が60日ごとに回ってくる庚申(かのえさる)の夜、天に昇ってその人の罪科を天帝に告げるため、命が縮められる」とする中国の道教の教えがあります。庚申の夜は眠らずに言行を慎み、本尊に健康長寿を祈念する信仰が行われるようになりまし。道教の信仰が根底にあり、これに仏教的な信仰が加わって、室町時代には庚申待をする講が始まりました。庚申待の行事や庚申塔造立は、人々の延命招福にあり、村の講中の人たちが一同お宿に集まり、本尊を礼拝し徹夜で酒食をとることから、村民の連帯につながりました。



海蔵寺

江戸時代には悪疫を調伏する青面金剛や、道案内に關する猿田彦神などが本尊となりました。庚申供養のため庚申の年などに庚申塔が造立されました。「庚申」ある



間沢天神山

いは「奉供養庚申塔」などと文字を刻んだものや、本尊である青面金剛や三尊仏を浮き彫りした供養塔が各地に造立されるのはこの地方では江戸時代中期以降です。庚申塔に青面金剛の神使である三猿が彫られるのは、「見ざる、聞かざる、言わざる」という謹慎態度を示すためとも言われます。日月(じつげつ)・鶏・邪鬼を彫刻するものも多く、それぞれ日待・月待信仰、魔性を圧伏する意味からきているものとも言われます。

庚申塔は集落の中心地や人寄りのする所、寺院の境内あるいは神社の境内などに建てられました。松川町内で最も古いものは元禄八年(1645)に造立された庚申供養塔で、秋葉神社境内に安置されています。

甲子塔(きのえね様)

干支による60の組み合わせのうち、甲子(きのえね)は第一番目であるため、「もの始まり」にたとえられます。子待・甲子待は甲子の日に甲子講の人々が集まって、大黒天の掛け軸を掛けて礼拝し、子の刻(午前零時から同三時)頃まで歓談する行事です。甲子塔は60年ごとに巡ってくる始まりの年(環歴)に、その供養として建立されたものが多いためです(最も新しい甲子の年は昭和59年)。甲子は「もの始まり」の意から、豊作祈願・招福などがその信仰の中心です。



下津庚申堂



中山

甲子塔は文字塔が多く、「甲子」・「甲子塔」・「子待塔」・「大黒天」などがあり、神道的表現では「大黒主命」・「大己貴命(おおこなむちのみこと)」・「大黒主神」などと表現する場合もあります。刻像塔では打出の小槌を持ち大きな袋を背負つて米俵を踏まえる

大黒天が刻まれます。大黒主命と記された塔や大黒様が刻まれた塔が単独である場合の多くは、豊作祈願・招福の甲子信仰によるものです。

月待塔（二十三夜塔）

特定の月齢の夜（アタリ夜）に集まって月を拝したり、礼拝本尊を祀って行う念仏行事を月待といひ、講衆が建てた供養塔を月待供養塔、略して月待塔と呼びます。通常の月待では特定の一夜だけですが、十七日から二十三日まで七夜にわたるものもあります。古来、月待は二十三夜待を主体としますから、近世以降の月待塔で月待や月待供養（塔）とあるのは、通常二十三夜待を指します。二十三夜待は旧暦23日の夜に行われる月待行事で、略して三夜待とも呼ばれ、勢至菩薩を本尊とします。



文字塔の主銘には、二十三夜（塔）二十三夜供養（塔）、三夜供養（塔）などがあり、本尊名の大勢至菩薩や得大勢至菩薩なども見られます。また神道的表現では、月読命・月夜見命（尊）などもあります。部奈にある「月夜見尊」は神道系の二十三夜塔として建立されたものです。二十三夜塔以外、十三夜塔（旧暦9月13日、後の月・豆名月）、十五夜塔（旧暦8月15日、仲秋の名月）、十七夜塔（旧暦17日、立待月）他があり、この日の夜は月見や念仏行事を行いました。月待信仰は作神的色彩が濃いと言われます。

馬頭観音

路傍に多く見られるのが馬頭観音で、文字だけを記したものと、観音像や馬の姿を刻んだものがあります。馬頭観音は馬頭菩薩・馬頭持明王ともいわれ、



六観音または八大明王の一つです。宝冠に馬頭を載せ、忿怒の相で、一面二臂・三面八臂・四面八臂など様々に表現されます。忿怒と異形の相は一切の魔障や煩惱を絶ち衆生を救済するため、観音の慈悲が方便として表されたものといわれます。一説には、インドの神話で、転輪王の馬が四方を駆けて敵を蹴散らしたように、怒りの激しさによって人々の苦しみを救う馬の形をした観音ともいわれます。



後に馬の守護神となり、家畜の守り神、旅の安全を祈る神として祀られました。路傍に見られる石仏刻像塔の多くは合掌した一面の観音立像が多く、頭上に馬頭を載せています。



道祖神（さいの神）

悪疫などを防ぐために各地の村境に造立された寒神・道祖神は、交通安全の意味を加えると共に、人の一生を旅にたとえて、妊娠・出産・幼児守護・良縁・和合、また性病の神としての性格を持つようになりまし。女の生殖を通して、生殖神、田の神・山の神的性格を持つなど、その発展変化は複



雑です。信仰自体は古くからありますが石造道祖神は江戸時代以降のものがほとんどです。



道祖神の多くは自然石に「道祖神」と刻んだ文字塔ですが、男女の神様の姿を刻んだものもあります。特に長野（主に松本平）・群馬方面には、男女の神が肩を並べたり抱擁したりした双体道祖神が多くみられます。



松川町の道祖神の大部分は自然石に「道祖神」と刻まれたものですが（道六神もある）、男女の神様を表わした双体道祖神が三体（中山・下峰・福沢）あります。中でも中山ネズミ尾の双体道祖神は祝言の衣装でお神酒徳利を持つっており、祝言道祖神あるいは酒器道祖神とも呼ばれるものです。夫婦（男女）の仲むつまじい永遠の愛を願い、子孫繁栄の祈りも込められています。

蚕神（蚕玉さま）

近世以降、養蚕が盛んになると人々は養蚕の繁盛を願って蚕神を造立しました。蚕神には石文字塔と、蚕神





下峠庚申堂

の姿を刻んだ刻像塔があります。刻像塔の多くは石塔形の舟形碑か、自然石を舟形に練り抜いたなかに半肉彫の女神像を表現しています。女神は天女形で宝冠を戴き、桑の葉や繭玉、福德の象徴である宝珠を持っています。姿は女神ですが、蓮座に乗り「蚕玉観音」と刻まれた仏像としての蚕神もあります。刻像塔のなかでも部奈や下峠にみられる丸彫の女神像は極めて少ないものです。女神の姿は舟形碑に彫られた女神と共通します。

一般的に見られる蚕神は石に神名を刻んだもので、蚕玉大神・蚕玉大明神・蚕玉神・蚕玉をはじめ、神話に登場する稚蚕霊命（わかみむすびのかみ）・木花開耶姫命（このはなさくやひめ）・保食神（うけもちのかみ）、または養蚕の神社名である蚕影山大神など様々です。また繭玉に似た自然石を蚕神とする場合もあります。

巳塔・蛇塔（へび神）

自然石に「巳」の文字を刻んだり、舟形の石塔に蛇の姿を浮き彫りしたりした石仏があります。一見嫌われがちな蛇ですが、蛇は弁財天のお使いで、福德の象徴とも言われます。人々は福德をもたらしてくれる蛇の姿や「巳」の文字を刻んだ石塔を立て、願いました。



御原

塔は養蚕地帯に多く見られます。蚕の飼育中、厄介なのはネズミの害でした。実はネズミの天敵は蛇なのです。養蚕地帯では

福德をもたらせてくれる蛇を蚕の守り神として崇め、ネズミの害がなくなることを願いました。「巳」の文字を二つ、三つと

刻んだものは、それだけ多く蛇のご加護を願ったものと解されます。蛇を表したり「巳」と刻んだりした石仏は、一般的には「へび神さま」と呼ばれています。

ねこ神

自然石や石塔などに猫の姿を刻んだ「ねこ神」は、東北信の修那羅峠や霊浄山のそれが知られてきました。最近では伊那谷にも見出されてきました。ねこ神はねこの姿を浮き彫りしたものが多く、線彫りのものもあります。また稀に丸彫りのものもあります。神名の文字を刻む例はほとんどありませんが、養蚕の守護神、飯島清水坂の例は、ねこの線彫りの上部に「猫神」と明記されています。現在、こうしたねこ神は、飯島町・高森町・松川町・中川村・伊那市などで各1〜3体ほどが確認されています。

ねこ神の分布を見ると、かつての養蚕地帯に見られます。また養蚕の守護神である「へび神」と共に祀られたり、養蚕守護の寺院・霊場などに認められ、蛇を表現した石塔に悪さをすく見られます。蚕に悪さをすく見られます。蚕の飼育中、厄介なのはネズミの天敵はへびと、今一つねこです。このねこの天敵は蛇なのです。養蚕地帯では



名字通台

のがねこ神と考えられます。ちなみに群馬県の養蚕地帯では石像としてのねこ神はありますが、ねこの姿を紙に記した極彩色の「ねこ絵」が養蚕の守護神（守符）として今も大切にされています。華厳寺の線彫りねこ神は、養蚕の守護神「蚕玉さま」の前面に安置されています。

地藏菩薩

地藏の石仏が作られるようになるのは鎌倉時代以降で、中国伝来の地藏と閻魔王など十王との合体が信じられて地獄に落ちた者の救済とか、夭折した幼児を守ってくれる賽の河原の地藏として地獄のホトケとしての信仰を集めるようになるのは室町時代になってからです。

江戸時代には地藏信仰は民間信仰と溶け合って現世利益のとなり、長寿・安産・育児・豊作等の切実な庶民の願望を分担して効験をあらわす地藏が生まれ、延命地藏・子安地藏・子育て地藏からトゲ抜き地藏、イボ地藏など、多種多様な名前前で呼ばれるようになりました。これらの中には「代受苦」といって、地藏が身代わりになって災難を逃れたり、治病などに効験が著しいとされたりする地藏が多いものです。「今昔物語」の地藏説話以来、右手に錫杖、左手に宝珠を持った若い比丘形で、地藏が行脚する僧侶の姿をしているのは、六道を巡るとして衆生を救済するという信仰に基づくもの



華厳寺の猫神



林豊院

の道祖神の役割も担い、さらに峠のホトケとなり地藏峠という名称の峠も少なくありません。



観音菩薩

正しくは観世音菩薩、あるいは観自在菩薩といます。その意味は、衆生が救いを求める声を聞くと、自在にこれを救う菩薩ということ。



衆生に悟りの法を解く如来に対し、観音は衆生に現世利益の救済を施す存在といわれます。いわゆる七観音とは、聖観音・如意輪観音・十一面観音・千手観音・不空罽索観音・馬頭観音・准胝観音をいい、普通に観音という場合は聖観音を指しています。石仏で普遍的に見られる聖観音は、右手



は施無畏印で左手に未開蓮を持つものが多く、像だけでは観音信仰によつて造立されたのか、

または例えば庚申の主尊として造立されたのかはわかりません。その場合には刻んである文字によってある程度判断できることもあります。

西国三十三ヶ所観音

洋の東西を問わず、宗教的な聖地巡拝は盛んですが、日本の巡礼で最も有名なものは観音札所巡りです。伝承によると、西国三十三ヶ所観音霊場巡拝を創始したのは奈良時代の長谷寺の徳道上人で、これを盛んにしたのは平安時代の花山法皇だといわれますが、当てはなりません。三十三という数字は、法華経に「観音菩薩は三十三の化身をして衆生を救う」というところから始まるらしいと言われます。中世には西国三十三ヶ所と坂東三十三ヶ所および秩父三十四ヶ所の霊場が定まり、合計百観音霊場となりました。これを札所と言うのは、巡拝者が祈願・姓名・出生地等を記した木札（納札）を打ち付けたことから生じています。



西国三十三ヶ所観音は桑園の弥勒寺に、坂東三十三ヶ所観音は中山の東小裏に、秩父三十四ヶ所観音は中山の馬出丁観音にそれぞれ祀られており、この三ヶ所を巡拝すれば百観音霊場を巡拝したと同じ利益を授かることができるかもしれません。

名号塔

名号塔とは、神仏の名号を誌した石塔の総称です。神仏の名号を唱えることは最も基本的な信仰表明の行為です。すし、名号を書き誌してこれを本尊として礼拝することも行われてきましたから、当然にこの信仰行為は石造物にも反映して、神名や仏名を刻んだおびただしい石塔が

造立されています。

石塔に弥陀の名号が多いのは、浄土教系の教義の浸透による



ものですが、なかでも「南無阿弥陀仏」のいわゆる六字名号が普遍化しているため、今日では名号塔といえは六字名号塔を指すこともあります。高名な宗教家の筆跡は特に尊ばれ、また布教活動の一環として宗教家が揮毫して信者に頒布した名号幅が石に刻まれることが多く、これらは署名や花押があつたり、独特な書体を示したりしてその宗教家の活躍の足跡を伝えています。上片桐清泰寺には江戸中期の浄土宗系の高名な念仏聖である徳本上人の巨大な名号塔があり、当時の人々の強烈な念仏信仰の姿を伝えています。

十王

冥界には十人の王がいて忌日ごとに亡者の生前の罪業を裁くという葬祭仏教の背景にある信仰があります。十人の裁断により六道のどこに生を受けられるか、あるいは成仏できるかが決まると言われます。そこで裁判が有利になるように忌日ごとに遺族が追善供養を営んだり、生前には逆修（預修）供養を営んだりするので、村々に十王堂が造立され木造や石造の十王像が祀られ、人々は亡者の追善供養や自身の極楽往生を祈りました。



【松川町資料館】